

第四十章 召 命

運命の同日選挙は、参議院選挙の告示の五月三十日から始まった。その日、日本列島は、東方海上に中心を持つ大きな高気圧に覆われて、夏型の気圧配置に変わり、朝から蒸し暑さが襲っていた。

午前九時からの迎賓館での華国録中国首相の歡送式を終えた大平首相は、グレーの背広に濃いエンジのネクタイをつけて、永田町の自民党本部にあらわれ、十時十五分、本部玄関前の出陣式に臨んだ。腕を曲げ、こぶしを突きだすガッツポーズで闘志をみなぎらせて檄を飛ばしたあと、首相は、候補者の応援のため、新宿に向かった。集まっている約三千人の聴衆にむかって、首相は遊説車の上から力強く呼びかけた。

「参議院の改選選挙は、本日から幕を切って落されました。やがて、われわれは、衆議院の総選挙も同時にお願いしなければならなくなりました。……皆さま、人間の集団にはいろいろ意見の違いも紛争もございませぬ。家庭において、職場において、あらゆる集団において常に意見を闘わし、よきものを創造してまいります。人間生活の発展であり、民主政治の道であると思っております。自由民主党も、結党以来、多くの論争を重ね、紛争を繰り返してまいりましたが、しかしながら、国民の安全を守り、生活を防衛し、日本の未来に責任を持たねばならぬという大きな一点におきましては、みじんも狂いがないのであります。……」。白手袋をつかんだ遊説車の手すりをゆすり、熱気のもった声で、首相は次第にボルテージを上げて行っ

た。言い直しも淀みもなく、頭の中の思いが、そのまま言葉になって出てくるような演説ぶりであった。

第一に訴えたのは、国の安全である。

「わが党は、平和を保障し、安全を守らねばならぬ厳肅な責任を持ってあります。……もし、社共両党の主張するように、安保体制を否認いたしますならば、……われわれの軍事力だけでわれわれを守らなければならぬとすれば、われわれの今日の繁栄も生活も犠牲にしなければならぬのであります……」。

首相は第二に、生活防衛への努力を約した。わが国が、二回にわたる石油危機を克服し、欧米諸国に比べて良好な経済状態にあること、石油の不足をきたすことのない政策運営を行っていることへの評価を求めた。

「このことは、市場経済の活力を活かし、国民が真剣な努力を傾け、政府がこれを善導してまいる自由経済体制が誤りでなかったことを証明いたしております」。

第三に、未来の安全を説いた。

「かわいい子供さんには確かな未来を、……お年寄りには、第二の生きがいある人生を用意しなければならぬのであります。あらゆる困難の中に確かな未来を……このことができる政党は、自民党をおいてほかにないことも、また明らかでございます」。

平生の首相とはちがった高い調子が続いていた。集まった聴衆は吞まれるようにこの演説に聴き入り、道行く人の多くが足を止めた。「いつもとちょっと調子が違うな」と囁き交わすものもいた。

と、突然、僅かであったが、首相の声がかすれ、生気が衰えた。だが、論旨を乱すことなく、演説は激しい野党攻撃にうつった。

「共産体制といい、社会主義体制といい、国民に対して、奇らしむべし、知らしむべからずの政治体制をとっております。権力者は何をしておるか、何を考えておるか、どういう生活をしておるか、さっぱり国民が知らないような体制をもって、どうして政治の倫理の確立と行政の綱紀の確立ができるであり

ましようか。わが自由民主党は、国民の皆さまの知りたいという権利に応えております。われわれの仲間の中でも、疑惑を受けた方々は、司直の手によって十分糾明していただいております。自ら政策対応能力のないことを棚に上げて、自らの能力の不足を問うことなく、他人の非ばかりを朝から晩まで洗うことによって歳費をいただいております者に、国民が本当に信頼をいたすものでございませうか」。

約三十分の演説を終えた首相はひどく疲れた様子だった。首相の車は、休息を予定されている自民党本部に急いだ。その車中、「暑いなあ、ちょっと苦しい。ノドの奥が痛い」と訴え、汗をふきつつも、秘書官らに演説内容について「どうだった」と熱心に問いただした。

首相は、血の気の失せた蒼白な顔でつつ向きがちに党本部に帰ってきた。そのからだは、上から下までシヤツが汗でグツシヨリぬれていた。タオルを何度も取りかえてぬぐったが、噴き出る汗はなかなか止まらず、ソファに横になった首相の顔色はよくならなかった。しかし、小一時間ほど横になっていると、次第に血の気が戻ってきた。

「さあ、午後の部をこなすか……」と立ち上がった首相は、昼食のため応接室に移ったが、用意されたソバにほとんど手をつけず、好物のメロンも一口か二口、口にしただけだった。

関係者の間では、午後の演説を打ち切ることも検討された。だが、政局の運命を賭けた選挙戦の初日である。陣頭に立つべき首相が緒戦に、身体の不調で遊説を打ち切ったとあっては、その与える影響はあまりに大きすぎる。関係者は中止の決断に踏み切れなかった。

「初日からこんなに疲れるのではいかなあ」とつぶやきながら立ち上がった首相は、午後に予定された横浜市内四力所の遊説に向かった。「一回五分ぐらいにしてください」という周囲のものの言を容れて、演説はなるべく短く、できるだけ総裁車で身体を休めるようにしたが、遊説車の屋根に上がる首相からは、ときとして、苦しさをこらえている表情がうかがえた。それでも、終盤には、元気を取り戻したように見え、演

説は身ぶりや手ぶりを交えて、二十分にも及ぶようになった。同行した関係者は、首相の演説ぶりから、大したことはなかつたのではないかと、不安を追いやることにとめた。だが、首相は残された最後の力を振り絞っていたのである。

一日五力所の遊説を終えた首相は、午後六時半に瀬田の私邸に帰った。奥の日本間に用意された寢床にくと、予め待機していたかかりつけの医師が直ちに心電図をとった。針が首相の心臓の状態を示すチャートを描くと、医師はさつと表情を曇らせて、志げ子夫人ら一部のものに、「狭心症か、心筋梗塞の疑いがあります。よくもちましたね」と告げた。主治医を始め三人の心臓病の専門医が招き入れられた。医師団の診断結果は、『絶対安静、直ちに入院』であつた。待機していた関係者は、背筋を言いようのない衝撃が走るのを感じた。九時頃には、会合に出ていた伊東官房長官がかけつけた。

医師の手によつて虎の門病院への入院手続きがとられた。志げ子夫人、伊東官房長官、秘書官らと医師団との間で、その後のことが協議された。まず、入院の病名が問題となつた。心臓の虚血性疾患であることに疑いの余地がなく、事実とかげ離れた発表は好ましくないという医師団の意見と、そのまま公表することの政治的影響を心配する秘書官らの主張とが交錯した。結局、「疲労による『一過性の不整脈』があり、数日間静養を要するので、大事をとつて入院する」と発表することになつた。遊説に行つていた田中六助副幹事長も人目につかぬようにかけつけてきた。ごく少数の党幹部には、入院の旨が告げられた。

玄関先の総理番の記者がひきあげたのは、十一時二十分である。それから、用意された寢台車が玄関につくと、みなが首相を抱き上げて担架に乗せ、寢台車に運んだ。首相は担架の上で、じつと目を閉じ、両手を胸の前で合わせて合掌の姿をとつていた。だが、首相の意識はすっかりしており、心配する家人らに、「たいしたことないよ」と言った。

病院についた首相は直ちに六階の心臓集中管理室に入れられた。上体にはモニターがセットされ、常時監視の体制がとられ、点滴が行われた。鎮静剤のせいもあって、首相は間もなく眠りに落ちた。

病院到着が確認された上で、自民党本部を通じて、三十一日午前二時、その日に予定されていた熊本遊説の中止が関係者に連絡された。突然の予定変更で、報道陣は大騒ぎとなったが、申合せどおりの発表が行われた。

入院後しばらくは、鎮静剤のせいもあって、うとうとしていることが多かったが、時々、腕を動かし、何事かつぶやいた。病室を見舞いにきた孫たちは、その姿を見て「おじいちゃんは、選挙をやっている」と話し合った。

六月一日には、海外からの見舞いの電報があいついた。見知らぬ女性から花束が届けられもした。

六月二日になると、痛みも消えたようである。首相は大分元氣を取り戻し、時折、医者に病氣の状況をきいたり、時には冗談を言ったり、秘書官らに選挙のことをたずねたりするようになった。党内、政府、友人、経済界はもとより、野党からも見舞いが寄せられた。

この日、衆議院選挙の公示に当たって、大阪でその第一声をあげ、今後の展望と所信を明らかにする予定であった首相は、病床から国民各位に対するメッセージを送り、自由民主党への理解と支持を訴えた。

また、診断に慎重を期していた医師団は、この日の午前十一時によろやく記者会見に臨み、三村信英医師が代表してメモを読み上げた。

「病名は、過労が引き金となったと考えられる『狭心症』である。……しかし、今までの経過は良好であって、今後の病状は悪化する可能性は少ないものと考えます。あと、どのくらい、ご入院になっていたかね

ばならないかは、今後の経過観察によらなければ判断は困難であるが、現時点では、少なくとも今後一週間はこの入院を続けていただき、慎重に経過観察をすることが必要と考えている……」。

記者たちからは、遊説の可能性はどうか、六月二十二日から行われるベネチア・サミットに行けるか、心筋梗塞の可能性はないか、などの質問が飛んだが、医師団は、記者たちに不安を与えないようにつとめて冷静に対応し、遊説はむずかしいが、個人的にはサミットに行けると思う、心筋梗塞にならないように一週間程度の安静が必要なのだ、と答えた。しかし、事實は、医師団はこの時点で一カ月半の入院、一カ月半の自宅療養が必要という診断を下していた。

六月三日、首相の回復ぶりはいちじるしく、円相場や物価について聞いたり、選挙の模様を心配したりした。桜内幹事長が見舞いにきたので、首相は、ベッドの背を少し上げて応対した。この時のことを桜内は次のように回想している。

「如何でございますか」と申し上げると、手を差しのべられた。私は「選挙は順調に進み、心配はありません」と申し上げた。総裁は「ご苦労をかけるな、しっかり頼む。なんとしても勝とう」と激励のお言葉があり、さらに十分に手をつくすように具体的なご指示があった。細い声だったので、私は一言も聞きもらさないようにつとめた。総裁が、いろいろ心配しておられるのが切々と私の胸にひびいた」。

この日、カーター米大統領から「ベネチアでお会いできるのを楽しみにしている」とのメッセージが届いた。海外からの見舞いの電報も相ついだ。

周囲の目には、首相の容態は、日増しによくなったように見え、付き添う家族を始め、毎日朝夕立ち寄る伊東官房長官らは愁眉を開く思いだった。

六月四日には、テレビが持ち込まれ、一日三十分という制限付きだが、ビデオでゴルフや寄席を見ることが許されるまでになった。この日、鈴木総務会長の見舞いに対して、首相は、「医者は慎重だが、もつすつか

りいいんだ」と、自分の判断を述べた。五日になると、さらに回復が進み、首相はすっかり退屈した表情だった。

六日には午後には持回りの閣議があり、大平総理は上半身を起こして署名した。七日朝九時半には、西村副総裁が見舞いに現れた。大平首相は、「西村さん、党の方はあなたが陣頭指揮をとってください」と頼んだ。

伊東官房長官をはじめ秘書官は、サミット出席問題について苦慮しはじめ、再三にわたって、医師団と相談するようになった。できることなら出席してほしいとの考えでは共通していたが、医師団はなかなか首をたてにふらなかつた。首相はぜひサミットに行くべきだという固い信念を持っていた田中六助副幹事長と、慎重を期す医師団との間に激しいやりとりがあったりもした。

入院後一週間が経過した頃になると、「入院が長期化する」、「サミットへの出席が微妙」、「代理出席を検討」などといった報道が大きく取り上げられ、これをめぐって政局は重大な局面になるなどの発言が目立ちはじめた。

マスコミは、臆測を交えて、病状についてさまざまな情報を伝えた。噂も飛びかかった。虎の門病院の会議室に連日つめている記者団から、そのような無用の臆測を消すため、短時間でも大平首相自身が代表取材に応じてどうかという提案があり、医師団は、少人数、短時間、医師立会いでなら受けてもよからうという判断をくだした。首相自身も、気軽にこれに応じ、八日、午前九時二十四分から二分間、内閣記者会の代表三人を招いて会見した。

「元気になって、できればサミットに行かれるように、との関心が持たれています」という記者たちの声に、首相は、「ありがとう」とこたえた。

九日には、第二回目の医師団の記者会見が予定されていたが、発表に先立って、首相自身の見解が発表された。

「本日、医師団より入院後の経過および今後の治療方針についての総合的な診断結果をうかがった。それによると、病状の経過は良好であり、近い将来、政治活動に支障のない健康体に十分なりうるということであった。しかし、そのためには、発病当初の療養が極めて重要であるとの厳しい注意をうけている。この医師団の判断を十分に踏まえて、当面の遊説は見合わせることにした。また、サミットの出席については、サミットの開催時期が一週間あとであればともかく、現時点で判断する限り、ある程度の危険を伴うので慎重に考慮すべきであるとの見解が示された。私としては、サミットの意義と日本の果たすべき役割を考えると、依然として是非出席したいとの希望を持っている。今後とも医師団には最善を尽くしてもらおうようにご努力をお願いしているので、十七日までには私自身で出席するか否かを決めたいと思っている」。

医師団の記者会見は、午後五時四十五分から行われ、山口洋医師は「今後少なくとも二週間の入院が必要」と発表した。この発表で、翌朝の新聞には、「サミットへの出席絶望」、「首相退陣必至か」といった見出しがおどった。

そのような新聞報道をよそに、大平首相の容態は、さらに快方に向かっているように見えた。医師や看護婦に冗談を言い、訪れた旧友に、「得病更知旧友情 非常思長夜之愁」という漢詩を作って見せたりもした。

選挙後の首相の動向には、いろいろな見解が公式、非公式に流された。世代交代を主張する声、首相の大局をみた決断を求める声など、さまざまであった。大平首相自身は辞任を決意していたと思われる。

大平首相は、かつて池田内閣の末期、池田首相が病に倒れたとき、内閣の幕引きと新内閣の誕生に心魂を傾けたことがあった。それだけに、この政局を混乱に陥らせず収束するには、どうしたらよいかは、最も心にかかるところであったにちがいない。大平は伊東官房長官や側近とさりげなく政治家の人物月旦を交わしたが、それは、後継首相を誰にすればよいかについての模索のあらわれであったであろう。大平は選挙情勢を詳しく知りたかったが、それは、選挙結果のいかんが、その後の政局を左右する重大な鍵であるためであ

った。しかし、心身の安静を最も要する首相の病状にとって、こうした神経の緊張をもたらす考えことがよいわけがなかった。

十日には、全党員にあてて同日選挙の必勝を訴える大平首相名のメッセージが発表された。それには、「苦痛なくして勝利なし、苦患なくして栄光なし」と記されていた。

サミットへの出席については、大平首相自身にも迷いがあった。その発言と表情からは無理すべきではないが、できることなら出席したいとの気持ちが読み取れた。サミットへの出席の有無が首相の進退にも関連する政治的意味合いを持つだけに、伊東官房長官や田中六助副幹事長は出席を強く進言しており、大平首相の回復ぶりも出席が可能とみられるほどであった。しかし、十一日夕刻、病室を訪れた側近に対し大平首相は「サミットは小事で、政局が大事だな」ともらした。おそらく首相は、サミットに出席すれば、それが自分の生命を奪うことになるかもしれないと考えたのである。しかし、もしそうなら、その後の政局はどうなるか。党はほとんど分裂も同然であり、選挙の結果も全く予測できない。政局の転換には、自分自身の存在がなお必要であり、そのためには、サミットに無理して出席すべきではない。それが大平の結論であったろう。すでに大平の脳裡には、後事を託すべき人物が決まっていたと推測される。

こうした首相の思いとは別に、その夜、秘書官らは、サミット出席の場合の機内のベッド、同行する医師と看護団、持ち込む医療機材、現地での休養態勢など具体的な医療看護態勢と首相の行動ルートを確かめることとした。外務省からの秘書官が急遽ベネチアへ赴き、十七日の総理自身の出席決定までにその情報を持ち帰ることが決まった。これは直ちに伊東官房長官の了承を得て、大平首相にも報告された。首相は、「そうか、わかった」と答えた。

午後九時、看護婦がその日最後の薬を投与した。

夜中に一度目覚めた首相は、「いま何時ごろか」とたずねた。付添いが、「十二時頃です」と告げると、「そ

う」と言つて眠りに落ちた。

異変は、その未明、午前二時二十五分に起きた。

付添いの「早く起きてください」という声に、隣室で寝ていた女婿の森田一秘書官が首相の病室に入った時には、すでに異常を発見した看護婦が、首相の胸をこぶしで激しくたたいていた。報せを受けて、志げ子夫人、次男裕の公子夫人、三男明夫妻、それに伊東官房長官、秘書官らがかけた。田中六助副幹事長も呼ばれた。

うなるような声が何度か首相の口からもれた。

志げ子夫人、公子夫人の話によると、首相は小さく手をふつて、まだ遊説をつづけているように見えたという。

心臓マッサージや電気刺激が続けられたが、その効果は現れなかった。

回復の見込みがほとんどなくなった五時から五時半になって、田中元首相、鈴木総務会長、桜内幹事長ら親しかつた党・政府首脳に「危篤」の報が伝えられた。報道関係者にも「首相の容態急変」が知らされた。

医師が志げ子夫人に臨終を告げたのは、五時五十四分であった。